

練馬区立大泉中学校
校長 惣 田 修 一

1 自己評価結果

(1) 概要

学校の現状について
本校は、全校生徒数767名、通常20学級、特別支援6学級で、都内でも有数の大規模校である。空き教室は1つもなく、少人数授業の展開や理科室での実験等が存分にできない。また、新型コロナウイルス感染症対策である三密をつくらない教育活動の展開も難しい状況にある。 にもかかわらず、コロナ前の状況と変わらない落ち着きのある学校生活を堅持している。これは、全教員による休み時間中の生徒の見守りと始業2分前の着席を推進し、チャイムと同時に授業を開始するという姿勢を、年間を通じて貫いてきたからである。 また、全教員が担任と副担任の別なく協調と協働を第一として、生徒と正面から向き合い、日々の教育活動を通じて信頼関係を築くべく取り組んでいることも大きい。特に、今年度唯一実施できた運動会では、実施形態を学年別にした上で保護者参観を可能としたことにより、熱い拍手喝采を浴びることにつながり、その結果、生徒一人一人に自信と誇りをもたせることにつながったという点で大きな成果を収めることができた。 一方、年度末の質問紙調査では、「学校生活は明るく活気があり楽しいですか」という項目に対して、生徒の肯定的評価92.4%(昨年度比2.4%増)、保護者の肯定的評価86.4%(昨年度比3.2%減)で、生徒の評価が上がり、保護者の評価が下がるという対照的な結果となった。コロナ禍で学校を公開する機会が運動会以外に持てなかったため、子供の実際の様子が伝えられなかったことが大きい。

今年度の重点目標について
① 学力向上～何を学んで、何ができるようになったのか i 大泉中授業スタンダードを踏まえた「わかる授業」「魅力ある授業」の展開と「主体的・対話的で深い学びを実現」をめざした授業の追求 ii 新学習指導要領を踏まえた指導計画・評価計画の作成と実施 iii 基礎学力の保証 iv 学習意欲の向上 v 習熟度別少人数授業の実施(数学) ② 秩序と活力ある学校生活の堅持 i 人権尊重に配慮した個別指導 ii 達成感のある行事の推進 iii 不登校生徒への対応 iv 情操教育の充実 ③ 特別支援教育の充実 i 特別支援学級(10組)と通常学級との生徒交流 ii 特別な支援を要する生徒(通常級)にも対応できる授業の工夫 iii 特別支援教室の充実 ④ 小中連携とOJTを生かした教員一人一人の指導力向上 i 全教科の連携による授業力向上 ii 生徒による授業評価を生かした授業改善 ⑤ 道德教育の充実とオリ・パラ教育の推進 i 「特別の教科 道德」のさらなる充実 ii 東京オリンピック・パラリンピックに向けた取組の充実
今年度の成果と次年度に向けた課題および改善策について
① 学力向上～何を学んで、何ができるようになったのか i 大泉中授業スタンダードを踏まえた「わかる授業」「魅力ある授業」の展開と「主体的・対話的で深い学びを実現」をめざした授業の追求 <成果> 全教員が年間少なくとも1回以上、大泉中授業スタンダードを踏まえた校内研究授業を実施した。ICT機器を活用するとともに、授業導入時の「目標設定」、展開時における「発問の工夫や学び合い、特に、対話的な学習活動の中から生まれる「気づきを生む授業展開」

に工夫が見られる授業が増えてきた。コロナ禍でグループ学習に制限があった際も、個人用タブレットパソコンのスプレッドシート機能を活用した意見共有など、グループ学習でお互いに対面にならなくても可能な対話的授業の実現にチャレンジしている。

この1年で教員の8割以上がタブレットパソコンを活用した授業展開に挑戦してきた。その結果、2学期末に実施した生徒対象授業評価質問紙調査では、授業に関する質問4項目の肯定的評価平均は84.2%で、昨年度と変わらなかったが、「授業がわかりやすい」の項目に絞った肯定的評価の割合は、92.5%で昨年度比1.9%増となり、成果を上げている。

＜課題＞ 書画カメラと液晶スクリーンについては、全教員が通常の授業で難なく使いこなしている。しかしながら、タブレットパソコンの利活用については、まだまだ教員の得手不得手による格差が生じている。ICT機器全般の利活用について、授業のどの内容、どの場面で何を使うのか（タブレット、書画カメラと液晶スクリーン、黒板、教材プリント）、その効果について検証していく必要がある。

タブレットパソコンを使って宿題や課題をさせる場合、その運用や成績への反映方法をどうしていくのか等、教科ごとに又は教科を越えて生徒や保護者とその利活用や運営面において理解を深めていくことが必要である。

ii 新学習指導要領を踏まえた指導計画・評価計画の作成と実施

＜成果＞ 2・3年生の通知表における観点別評価の割合（4:3:3）については、昨年度より保護者会で共通理解を図ってきたおかげで、混乱なく移行できた。また、新1年生の観点別評価の割合（1:1:1）についても、保護者会で理解を得ることができており順調であった。

年度当初に、評価に関する教員研修会をもち、新しい評価感に基づいた観点別評価、評価の総括について教員間の足並みをそろえることができた。

＜課題＞ 各教科における指導計画・評価計画に対する課題の改善を明確にしていくとともに、教科部会のさらなる充実を図っていく。

iii 基礎学力の保証

＜成果＞ 定期考査前には、「もっと勉強したい」「分からないところを分かるようにしたい」という生徒の思いに応え、各学年で質問教室の時間を設けて対応した。スプリングコンテストや計算コンテスト等を実施し、基礎・基本の定着を図った。

＜課題＞ 今年度は、コロナの影響もあり、秋に実施している3年生対象の「地域未来塾（学習に不安をかかえる生徒対象）」の開設ができなかった。また、「勉強がわからない・授業についていけない」という課題を抱える生徒に対する学習保障をしていくことが時間的に難しい。

iv 学習意欲の向上

＜成果＞ 各種検定試験受験者数の延べ合計人数は、652名（英検受験者数411名、漢検受験者数148名、数検受験者数93名）で、多くの生徒が受験に前向きな姿勢を示している。

＜課題＞ 今年度学習支援ソフトを導入したにもかかわらず、学習状況に関する質問紙調査「家庭学習に意欲的に取り組んでいる」という項目に対する割合の平均数値は昨年度と変わらず52.5%で伸びない。良い教材と良いシステムが構築できてもそれだけでは、学習意欲の向上につながらないということが明確となったので、今後は別な角度からのアプローチを工夫していく。

v 習熟度別少人数授業の実施（数学）

＜成果＞ 2、3年生の数学科で習熟度別少人数授業を実施している。通常の学級では、集中力を欠く生徒が、少人数授業（基礎コース）では積極的に教員の発問に反応して発言する。また、一方で、発展コースの生徒は、難しい問題にチャレンジして、互いに切磋琢磨する姿が顕著となっている。

＜課題＞ 基礎、標準、発展の3コースを設け、4人の教員が関わるので、評価の妥当性を維持するために綿密な打ち合わせが必要となる。現在2、3年生のみで少人数授業を展開しているが、空き教室が確保できれば、全学年実施も検討課題としていく。

② 秩序と活力ある学校生活の堅持

i 人権尊重に配慮した個別指導

＜成果＞ 年3回のふれあい月間に合わせて行ういじめ質問紙調査では、記述のあった生徒について漏らさ

ず対応し迅速に解消した。また、年2回の三者面談と夏季休業日明けには行う教育相談では、生徒の気持ちに寄り添う個別面談の充実を図るなど、多角的にいじめに対する早期発見を試みた。一方、SNSトラブルに関しても「大泉中SNSルール」を踏まえ、学校の知り得たトラブルに対して、保護者との協力を図りながら対応した。

＜課題＞ 校外でのSNSに関するトラブルが絶えない。保護者との連携をより一層強め、ルールの徹底を共有化していく。

ii 達成感のある行事の推進

＜成果＞ 学校評価質問紙調査において、今年度実施された唯一の学校行事である運動会が「活発に行われたか」という質問に対して、保護者の肯定的評価は95.4%(6.3%増)となり、一昨年の数値95.1%とほぼ同じ割合に戻った。運動会の形態を学年別として保護者参観を可能とした結果である。

＜課題＞ 今年度も昨年度に引き続き合唱コンクールが中止となった。2年連続中止により、高いクオリティを追求してきた合唱コンクールの伝統は継承できなかった。宿泊行事と二大行事復活の折には、本校の強みである「感動・感謝・モチベーションの続く行事」の追求をしていく。

iii 不登校生徒への対応

＜成果＞ 今年度より、不登校対応の目標を不登校生徒の出現率という数値目標で示すことはせず、「キャリア発達(自分らしい生き方を実践していく過程)への歩みを止めてしまう生徒0人」とした。そのために、毎週1回教育相談部会を行い、特別支援教育専門員、本校SC、心の相談員、教育相談センター、トライ教室(適応指導教室)、SSWr、子ども家庭支援センター、主任児童員等、練馬区のあらゆる機関との連携を図りながら、生徒個々の特性や課題に応じた対応策を検討し、歩みを完全に止めてしまっている生徒の数を限りなく0人に近づけることができた。

＜課題＞ 完全に歩みを止めてしまっている生徒の数は、確実に減ってきているが、コロナによる出席停止を含めて学校に登校できていない生徒の数の割合は7%(約50名)で非常に多い。

iv 情操教育の充実

＜成果＞ 昨年度に引き続き、特別支援学級10組による文化発表会パフォーマンス(平成29年度より3年連続実施)を全校生徒の前で行うことができなかった。しかしながら、コロナ禍における本校唯一の文化行事の発表として全教職員の前で披露することができた。

＜課題＞ 合唱コンクールや芸術鑑賞教室等、生徒の心に響く行事の復活とともに代替行事の可能性を検討していく。

③ 特別支援教育の充実

i 特別支援学級(10組)と通常学級との生徒交流

＜成果＞ 昨年度同様、今年度においても運動会でのリーダー的役割を特別支援学級の生徒が担うことができた。

＜課題＞ 企画していた交流会のほとんどがことごとく中止となった。次年度に向けコロナ禍でも可能な交流を検討する。

ii 特別な支援を要する生徒(通常級)にも対応できる授業の工夫

＜成果＞ 特別支援教育推進部会を毎週実施したことにより、特別な支援を要する生徒の抽出とその対応がより一層明確化した。それを踏まえ、個別支援計画、学校生活支援シート、MSUR連携型個別支援計画の三本立てでの支援体制を確立した。また、通常学級に生活支援員が2名配置されたことにより通常における特別支援教育への取り組みが向上した。

＜課題＞ 特別支援教育推進部会で検討された様々な資料の充実を図った一方で、部員以外の教職員にその内容を十分浸透させられなかった。

iii 特別支援教室の充実

＜成果＞ 特別支援教育コーディネーターを中心に、部員(特別支援学級主任教諭を含む)、特別支援教室専門員、巡回指導教員、がそれぞれの立ち位置を踏まえた上で意見を交え、校内の特別支援教室利用検討会に向けた校内での検討内容がより一層充実した。

＜課題＞ 生徒数が増加したことにより、特別支援教室だけでは対応しきれず、他の部屋を使わなければならなくなっている。利用する生徒数の増加傾向を考えると施設の拡充を図ることが喫緊の課題だが、その場所が見つからない。

④ 小中連携とOJTを生かした教員一人一人の指導力向上

i 特定教科の連携による授業力向上

＜課題＞ 新教育課程全面実施を踏まえ教科別の研究授業復活を目指したが、コロナにより断念。小中連携課題改善カリキュラムを生かした大泉地区の学力向上が課題。

ii 生徒による授業評価を生かした授業改善

＜成果＞ コロナに負けることなく、今年度も授業改善を意識した。6年間連続して実施してきた実績をもとに、個人、学年、学校全体という3つの側面から、学び合い学習に制限がかかった状況での授業展開、タブレットパソコンの利活用を踏まえた授業の工夫、3つの観点を意識した評価と指導の一体化を図ることを推進した。

＜課題＞ タブレットパソコンを含めたICT機器が、授業で効果的に活用されているかどうかの検証。

⑤ 道徳教育の充実とオリ・パラ教育の推進

i 「特別の教科 道徳」の実施に向けた取組の充実

＜成果＞ 昨年度に引き続き、学年教員の題材別ローテーションによる授業方法を全学年に取り入れて実施した。全教員が担任副担任の別なく道徳の授業に係ることによって、道徳の授業に対する質の向上を図った。その一方で、道徳地区公開講座では、全担任が「いじめ」に関する内容項目に重点をおいた指導を行い、取組の一環としてゲストティーチャーを招いた講演会を開催し、生徒の心を動かす指導が実現した。

＜課題＞ 授業で道徳の内容項目をどこまで深められているのかをより一層明確にしていくこと。

ii 東京オリンピック・パラリンピックに向けた取組の充実

＜成果＞ 感染するはずだったラグビーについて、地域人材を生かして講演をしていただいた。

＜課題＞ 東京オリンピック・パラリンピックレガシーを道徳や総合的な学習の時間に組み込み生かす工夫をしていくこと。

(2) 根拠となる資料 *今年度の学校経営方針をもとに作成

＜達成度 ◎:十分に達成 ○:おおむね達成 △:課題が残る＞

④ 重点的な取組事項ー1 学力向上～何を学んで、何ができるようになったのか

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
①大泉中授業スタンダードを踏まえた「わかる授業・魅力ある授業」の展開と「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業の追求	・全教員が年間2回以上指導案をもとにした校内研究授業を行う。	・1学期に1回目、2学期に2回目を行う。	・1学期終わりから2学期にかけて1回目を実施した。2学期終わりから3学期にかけて2回目を計画しおおむね達成。	＜課題＞コロナ対応と年間2回の実施は時間割作成上困難であった。授業力向上のための別策を考える時期。	△
	・研究授業後に教科部会で協議会を行い同僚性の向上を図る。	・2回目は教科部会全員で授業観察し協議会を行う。	・2回目の研究授業における教科部会を確保ができず、授業力向上に向けた同僚性の向上を図るという風土の定着を図ることができなかった。	＜成果＞タブレットパソコンを活用した授業研究が定着した。 ＜課題＞1教科に複数の教員がいるという強みを生かした新たな方策を検討していく。	○

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
	・全校生徒による授業評価実施（1・2学期に各1回） ・評価項目（4～7）の肯定的評価平均90%以上 ・質問項目3（家庭学習に意欲的に取り組んでいる）の肯定的評価55%以上（昨年度52%） ・ICT活用（特にタブレットパソコンの利活用）を推進していくための校内研修会を1回以上実施	・授業評価結果を分析し、授業改善を推進する。 ・2学期質問紙調査の評価を、3学期の授業改善に生かす。 - ICTの効果的な活用方法について教科を越えて高め合う風土を醸成する。	・2学期末質問紙調査の結果、項目4～7の肯定的評価平均は、84.2%で、昨年度数値とほぼ横ばいの結果となった。高水準を維持できているが、目標数値の90%には至らなかった。しかしながら、「授業が分かりやすい」の項目に絞った肯定的評価は、92.5%で、昨年度比1.9%増となり、成果を上げている。 - ICT推進委員会が中心となってタブレットパソコンの活用に関する研修会を開き、全教員がタブレットパソコンを使う授業をすることができるようになった。	〈成果〉コロナ禍で様々な制限があるにもかかわらず、授業に対する肯定的評価の割合が大きく減少することはなかった。 〈課題〉家庭学習用自主教材ソフトを2学期より導入し、生徒の自発的な学習を期待したが、十分な成果を得ることはできなかった。次年度は学校からの積極的な働きかけをしていくことが課題。 〈成果〉生徒が授業中にタブレットパソコンを活用する機会が非常に増えた。 〈課題〉ICTの効果的な活用場面の検討。	○ ◎
②新学習指導要領を踏まえた指導計画・評価計画	・新教育課程完全実施を意識し、年間指導計画と評価計画を事前開示 ・評価の信頼性・妥当性を追求する	・保護者会において配付する。 ・校内研修会を実施する。	・年間指導計画・評価計画については遺漏なく保護者に配付した。 ・年度当初に外部講師を招聘し、3観点における評価の妥当性と信頼性について校内研修を実施した。	〈成果〉指導と評価の一体化、3観点における評価の信頼性と妥当性について、全教員でスタンダードを共有できた。 〈課題〉各教科における評価精度のさらなる向上。	○
③基礎学力の保証	・確認テストや小テストを実施し、できなかった生徒に追指導を行う。 *「やればできる次もやってみよう」という学習モチベーション向上 ・5日間の夏季補充教室を実施する	・基礎的な内容に焦点をあて確認テストや小テストを実施する。 ・夏季休業に入る前に生徒の選抜、補充学習内容の精選	・一部の学年、一部の教科で学習コンテストを実施した。 ・4日間の実施となった。	〈成果〉授業わからない、ついていけないという生徒への救いの取組となった。 〈課題〉学校全体の取組として優先順位を上げていくことが課題。 〈成果〉 ・学習に積極的ではない生徒であるにもかかわらず、休まず参加する生徒が多くいた。	○
④学習意欲の向上	・キャリア教育の充実 - 考査前補充学習教室（任意設定）	・「働くこと」への関心意欲を高め、学習意欲の向上を図る。 ・「よくわからない」「もっと学びたい」生徒対象の補充学習実施	・コロナ禍ではあったが1年生で職場体験学習を実施、2年生では、オンラインによる上級学校インタビュー実施した。 ・定期考査前に、全学年で時間保証をして質問教室を実施。	〈成果〉生徒に自分の将来に対する夢や希望を抱くことの大切さを教えることができた。 〈成果〉全学年で質問教室を設定できた。 〈課題〉生徒が最も勉強したいというタイミングを逃さない工夫。	○

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
	各種検定試験については、可能な限り継続して受験を奨励（昨年度は3種合計で731名が受験）	・積極的な受験の奨励	・受験者数の延べ人数合計数は、652名（英検411名、漢検148名、数検93名）。	〈成果〉コロナ禍でありながら、受験者数の合計人数を大きく減らすことはなかった。 〈課題〉3教科の教員への負担が大きい。負担減への方策が課題。	◎
⑤習熟度別少人数授業の実施（数学）	・より効果的な展開の仕方を試行していく（3学級4展開と2学級3展開の併用等）	・2・3年で習熟度別少人数授業を展開する。 ・数学科の学習支援講師を1年生TTとして活用する。	・コロナ禍により習熟度別少人数授業の展開が難しい時期もあったが、年間をとおしてほぼ順調に実施できた。	〈成果〉授業についていけない生徒の学習意欲が高まった。 〈課題〉複数の教員が関わるので、日頃から適正評価への共通認識を維持していく。	○

重点的な取組事項－2 秩序と活力のある学校生活の堅持

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
人権尊重に配慮した個別指導	・年度当初に全校生徒対象の教育相談を実施 ・年2回の個別面談実施	・得た情報を組織で共有し、即事対応を図る。	・教育相談と個別面談で友人関係のトラブル等に即事対応を図った。 ・年3回のいじめに関する質問紙調査と年1回の体罰・暴力に関する質問紙調査を実施。	〈成果〉重篤ないじめ案件、暴力案件は出現しなかったが、生徒が記述した内容については、即時対応を図った。 〈課題〉言語環境に対する意識改革	◎
達成感のある行事の推進	年度末の質問紙調査の結果、肯定的評価90%を堅持する	二大行事（運動会・合唱コンクール）の推進	・運動会実施 「主体的に取り組めたか」という項目での肯定的評価92.8%（昨年度比0.2%減） ・合唱コンクール中止	〈成果〉学年別実施となったが、生徒に達成感を待たせる運動会となった。 〈課題〉次年度は二大行事の復活を図り、コロナ前の肯定的評価95%以上を回復する。	○
不登校生徒への対応	キャリア発達（自分らしい生き方を実践していく過程）への歩みをやめてしまう生徒0人	教育相談部会を充実し、個別のアセスメントを作成し、PDCAで改善を図る。	キャリア発達への歩みを完全に止めてしまっている生徒は、全校で2名。	〈成果〉学校組織だけでなく、他機関との連携が太い。結果、何の手立てもないという生徒はほとんどいない。 〈課題〉今年度より達成目標を変更した。その成果が現れているので当面の間継続していくことが課題。	◎
情操教育の充実	年度末質問紙調査項目「楽しい学校生活」90%以上を維持	めりはりのある教育活動の展開	生徒質問紙調査の「学校が楽しい」への肯定的評価92.4%。昨年度比2.4%増。	〈成果〉部活や行事に制限がある中で、この項目に対する肯定的評価が高かったこと。	◎

重点的な取組事項－3 特別支援教育の充実

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
10組と通常学級との生徒交流	・学校質問紙調査「10組と通常学	・今年度もボッチャ交流を継続実施 ・他にも効果的な交流の	・学年別運動会で可能な種目すべてに参加を果たした。	〈成果〉 ・運動会での交流場面が非常に増えた。	○

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
	級との交流は十分行われている」に関する肯定的評価 80%以上 (昨年 77.1%)	あり方を分掌組織で検討して実施	・コロナにより以下の交流活動が中止となった。 ボッチャ交流 給食交流 10組生徒による校内文化発表会	〈課題〉 ・学校質問紙調査の結果は74.9% (昨年度比 2.2%減) ・コロナ禍でも可能な行事の再検討	
特別な支援を要する生徒(通常級)にも対応できる授業の工夫	ユニバーサルデザインの授業を実施する。 特別支援教育推進委員会の定例実施と個別指導の必要な生徒への支援計画を作成する 校内研究授業の実施(年間1回以上)	特別支援教育推進委員会発信による具体的な提案(教室環境のユニバーサルデザイン化等)と全教員の共通認識を向上させていく。 ・特別支援教育推進委員会での検討、共有化の推進 10組の研究授業を全教員で参観し、講師を招聘して通常における特別支援教育を踏まえた研究協議を行う。	配付物文書におけるUDフォントの活用や、授業時における「目標、振り返り」の掲示、教室の掲示物配置等、様々な配慮がされている。 ・個別支援計画、学校生活支援シート、MSUR連携型個別支援計画の三本立てでの支援体制づくりを行った。 予定はしていたが、今年度も中止となった。	〈成果〉推進委員会が中心となって特別な支援を要する生徒に対する支援方法や具体的な手立てについてより一層明確な発信ができている 〈課題〉発信された内容の共有化 〈成果〉三本立ての支援体制がマニュアル化してきている。 〈課題〉全教員による共有が不十分であること 〈課題〉2年連続で中止となってしまった。次年度に新規に企画する。	◎
特別支援教室の充実	・特別支援教室利用に関する課題発掘とその改善策について全教職員の共通理解を図る機会を設ける。	・特別支援教育推進委員会の定例実施 ・全教職員に対して支援教室利用に関する大泉中ガイドラインを作成する。	・特別支援コーディネーターと特別支援教育専門員が連携し、教室利用の生徒に対する様々なルールづくりを行った。 ・支援教室の充実とともに利用したいという生徒が増加してきている。	〈成果〉MSURを利用する生徒への配慮が一定のルールに基づいて手厚く行われている。 〈課題〉今年度できなかった小集団活動の復活。施設面の拡張。連携型個別指導計画の浸透。	◎

重点的な取組事項－4 小中連携とOJTを生かした教員一人一人の指導力向上

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
全教科の連携による授業力向上	・コロナ禍ということを考え、今年度については年間2回の研究協議会実施を原則とする	・作成した小中のカリキュラム連携の見直しと確認	・近隣小学校と校長、副校長、小中連携クリエーターでそれぞれリモート協議会を実施した。	〈成果〉小学校と中学校でコロナ禍での教育活動について情報交換した。 〈課題〉学力向上を狙いとしたカリキュラム連携の見直し。	△
生徒による授業評価を生かした授業改善	年間2回(1学期末・2学期末)授業評価を実施する。その結果は教員個々が授業改善の手立てとして活用する。	集計結果を教員にフィードバックし、経年で自己の授業評価を把握し授業力の向上に役立てる。	集計結果の数値向上を目標にしている教員が増え、ICTの活用にも意欲的になっている。	〈成果〉授業改善に対する教員の意識は向上してきている。 〈課題〉タブレットパソコンの利活用を含め、新学習指導要領完全実施に向けた授業改善を一層図っていく	○

重点的な取組事項－5 道徳教育の充実とオリパラ教育の推進

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	成果・課題	達成度
「特別の教科 道徳」のさらなる充実	・「特別の教科 道徳」の内容充実 ・意図的、計画的な35時間の授業	ローテーション方式の授業展開を継続実施する。	全学年ローテーション方式の授業展開が定着してきている。	〈成果〉オリジナリティーのある道徳教材が生まれてきている。 〈課題〉授業内容の充実を図る新たな策略	○
オリ・パラに向けた取組の充実	・年間計画の作成と実施 ・関連した講話を行う	・進路指導部を中心として意図的、計画的に実施する。	・外部講師を招聘し、観戦予定だったラグビーについて講演会を実施した。 ・観戦は中止となった。	〈成果〉観戦は中止となったが、ラグビー講演会の内容がとても良かった。	○

2 次年度の学校改善に向けた校長の見解

(1) 本年度の学校評価より

特別支援学級の生徒を含め、本校に在籍する生徒数は767名。コロナ禍で三密を避ける日々を送るとともに、ガイドラインを踏まえ可能な限り充実した学校生活していくためには授業や行事に様々な工夫が必要であった。結果、授業中の集中力は非常に高く、落ち着いた学校生活を送ることができている。

この要因として、以下のことがあげられる。

- ① 挨拶、返事、礼節を重んじる校風を上級生が見本となって行うことを、学校の誇りとしている。
- ② 全教職員の協調と協働により、2分前着席、チャイム授業開始という日々の学習規律を堅持している。
また、給食指導と清掃活動という場面においても、担任・副担任の別なく全教員で指導にあたるという実践が功を奏している。
- ③ 二大行事（今年度は運動会の実施となったが）に、全生徒・全教職員が一丸となって取り組み、大きな達成感を得ていることから、「感動・感謝・モチベーション」という良いサイクルをなんとか維持することができている。
- ④ 全教員が、「わかりやすい授業の展開」を目指し、授業力の向上に真摯に向き合い、互いに切磋琢磨し合うという同僚性の向上をめざしている。
- ⑤ 学力保証と学力向上を踏まえ、流動的な時間割を組むことによって授業確保に努めている。その結果、すべての教科において標準授業時数の確保ができている。

(2) 次年度の学校改善に向けて

教員の授業力向上が生徒の学力向上につながるという基本理念を6年間にわたって堅持し授業改善を目指した。その方策として、各教科の教員数が複数いるという本校の強みを生かし同僚性の向上を図るという方策をとってきた。具体的には、年間2回の全教員による研究授業の実施であるが、時間割の編成上かなりの負担となってきていることから、次年度は年間1回にするなど方策の変更を検討していく。

一方、生徒による授業評価については、1学期末、2学期末に行いそれぞれ、その結果を次の学期の授業改善に生かすというサイクルを次年度以降も継続して実施する。次年度は、新学習指導要領完全実施2年目となるので、「大泉中授業スタンダード」の見直しを図り、授業展開におけるミニマムの改訂を全教員で共有する。

アクティブラーニングに係わる項目とICT（特にタブレットパソコン）を取り入れた授業を率先して推進するとともに、PDCAサイクルを生かしたカリキュラムマネジメントを意識し、学習内容をどう定着させていくのか、学び合い学習の中における気付きをどれだけ自分の学習に生かすようにしむけるのか、家庭学習のあり方にどう踏み込んでいくのか、といったことを踏まえ今後も更なる授業改善に取り組む。

また、秩序と活気のある学校生活の堅持に向け、引き続き全教員が協調と協働を重視して一丸となって取り組む。「上級生が下級生の見本となる」「74年の伝統に培われたイズムを大切にする」を学校生活のあらゆる場面で生徒に意識させていく。不登校生徒、特別な支援が必要な生徒への対応については、次年度も細分化して最重要課題としていく。教育相談部会（不登校対応）と特別支援部会を別組織として運営していくことと、特別支援教室(マイステップアップルーム)の充実、それに伴う専門員と巡回指導教員の役割等、学校と外部機関の連携、統合をより一層充実させていく。